

中津藩辛島医家旧蔵の写本「種痘新説」とその背景 について

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学 : 名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/2231627>

出版情報 : 2019-03-30. 中津市教育委員会
バージョン :
権利関係 :

中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書 XVIII
ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀 共編

史料と人物 VI

平成31 (2019)年 3月

発行者 中津市教育委員会
刊行 中津市歴史民俗資料館
〒871-0055 大分県中津市1385番地 (殿町)
TEL 0979-23-8615
印刷 株式会社 川原田印刷社

ISSN 2432-0773

中津藩辛島医家旧蔵の写本「種痘新説」と その背景について

ミヒエル・ヴォルフガング

キーワード

種痘新説、牛痘新書、牛痘接法、日高涼台、有馬撰蔵、高野長英、Jan Cock Blomhoff, Johann Heiman Goldschmidt

はじめに

近世の中津地方において痘瘡の研究に最も積極的に取り組んだ藩医・辛島長齡（正庵、一七七九〜一八五七）とその養子長徳（一八〇六〜一八四五）が遺した資料のほとんどは、長徳が岩国で修めた池田流痘瘡学の流れを汲むものであるが、写本「種痘新説」だけは全く異なる系統である。同書の成立を示す奥書はないが、「名医エンネル」、「名医ペアルソン」、「名医ウートウイルレ」、つまり牛痘接種の先駆者 Edward Jenner、George Pearson、William Woodville を取り上げているので、一九世紀初頭のイギリスにおける動きを反映した牛痘導入初期のものと判明している。表紙と一丁目に見られる四つの印影から、辛島父子にとってこの写本が大切なものであったことがうかがえる。



図一 「種痘新説」〔壺印〕蕉庵、〔印〕「精徳堂蔵書」、精徳堂蔵書、辛島徳印

一、「種痘新説」の訳者について

「種痘新説」は牛痘に感染した牛や接種後の人間に見られる水疱（「牛痘」）が真痘か偽痘かを判断する方法を紹介した上で、その「種子」の確保と「貯る法」、接種方法を説明し、さらに接種後から痂が落ちるまでの毎日の経過を記述している。このような実用的な資料はある程度普及していたはずであるが、同名のものは現存していないようである。九州以外の地域について調べたところ、蒲原宏が一九五九年に類似の写本を紹介していた⁵⁾。越後国蒲原郡加茂の蘭方医森田千庵（一七九八〜一八五七）の遺品資料に「和蘭悉乙勃兒咄著種痘書」という約五〇〇〇字の自筆写本が含まれている⁶⁾。ところどころ語句の違いはあるが、基本的構成と内容は中津の「種痘新説」と一致している。漢方医の生家で医業の基礎を身につけた千庵は、文政三年（一八二〇）に京都の藤林普山に入門し、その後、江戸の宇田川塾に入り、蘭方系の医学を極めた。さらに文政九年（一八二六）から翌年までオランダ商館医シーボルトにも師事し、文政十一年（一八二八）に、亡くなった父の後を継いだ。森田の経歴から、上述の「種痘書」は長崎で成立したと思われる⁷⁾。

出島商館医シーボルト (Philipp Franz von Siebold、一七九六〜一八六六) は、自著『NIPPON』などで自身が牛痘接種法を日本に導入したと主張しているが、確かに来日後に数名の子どもに牛痘接種を実施したものの、痘漿が腐敗

していたため成功しなかった⁸⁾。この件について、安芸の医師日高涼台の訳書「牛痘新書」に息子涼民が寄せた記述がある。

「愚父在長崎の頃、蘭医シーボルト、牛痘種を持渡り、長崎にて児三人に種ゆ。其種る人に金百疋づ、菓子料を遺したり。然るに一万三千里の波濤を越へ、日月を経て、其種枯せらるにや、皆共痘に感ぜず可惜事なり」（「牛痘新書」より）。

安芸の新庄にある医家に生まれた日高涼台（一七九七〜一八六八）は一才の頃に新宮涼庭と接して蘭学について知り、その後文化一三年（一八一六）に大坂で高須琴に儒医学を、同一四年には京都の福井棗園に古医方を学び、引き続き新宮涼庭および華岡青洲に師事した。文政六年（一八二三）に彼は故郷へ帰り開業したが、その二年後、長崎で文政一〇年（一八二七）までシーボルトや鳴滝塾での通訳を務めた吉雄権之助（一七八五〜一八三一）から西洋医学を学び、大坂および故郷の竹原で眼科医として開業した⁹⁾。

興味深いことに、杏雨書屋蔵の日高資料にも「悉乙勃兒咄」の「種痘書」がある¹⁰⁾。成立の背景を示す情報としてはシーボルトの名しかないが、ほぼ同じ内容の訳書「牛痘新書」の巻頭に「安芸処士 日高涼台一訳」とあり、巻末に「文政九西夏¹¹⁾六月訳於長崎客舎」とあるので、この訳文はシーボルトの長崎滞在中に完成したことになり、森田千庵の「和蘭悉乙勃兒咄著種痘書」と中津の「種痘新説」は、日高

の訳に基づいて作製されたと考えられる。

図一 日高涼台夫妻（『広島県山県郡医師会史』より転載）



杏雨書屋蔵の写本は一九世紀後半以降の写しである。長い間不明だった涼台の自筆本の所在は、二〇一八年三月に刊行された『鳴滝紀要』の論文で明らかになった。牛痘法普及における涼台の業績を取り上げた織田毅によれば、「種痘新書」の草稿と清書本は日高家から長崎のシーボルト記念館に寄贈されている¹³。

シーボルト自身が執筆した種痘関連の書籍は存在しない。一九八九年に「日高涼台の蘭学」を調査した吉田忠は、杏雨書屋蔵の写本「和蘭悉乙勃兒咄著種痘書」と「牛痘新書」¹⁴の

内容およびその背景を詳細に分析した上で、涼台の翻訳が出来るうちに、当時の高名なオランダ人外科医の名に仮託してシーボルト著としたのだろうと分析している¹⁵。

二、底本について

日高涼台の訳書の底本は、緒方洪庵の高弟有馬撰蔵（一八一七〜一八四七）が一八四〇年代に全訳した本と同じもので、有馬の訳書の標題紙によれば書名や著者名は次のようになっている。

「牛痘新書 和蘭紀元一千八百二年於亜謨斯埒兒陀無訳行
フランクホルト 独乙地名 医員 ヘーエマンヨセフゴルトスミ
ット著

肥前 長崎 上野常足 蔵書

讃岐 高松 有馬撰蔵 訳

著者名の「ゴルトスミット」はドイツ・フランクフルト (Frankfurt am Main) の医師ハイマン・ヨーゼフ・ゴルトシュミット (Heimann Joseph Goldschmidt) である。彼が一八〇一年に発表した『Allgemeine Übersicht der Geschichte der Kuhpocken und deren Einimpfung (牛痘と種痘の概史)』は、すぐにオランダ語に訳され、一八〇二年にアムステルダムで『Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepocken, en derzelver inenting (牛痘と種痘の概観)』として刊行された。

図三 ゴルトシュミット著『牛痘と種痘の概史』（ドイツ語版、一八〇一年、オランダ語版、一八〇二年）



オランダ語版の訳者名は示されていないが、ゴルトシュミットの本に着目し素早くオランダ語版を作成したのは、牛

痘接種推進派の専門家に違いない。当時のオランダ医学界で目を引くのは、ロッテルダムのユダヤ人医師レオナルドゥス・ダーフィズ (Leonardus Davids, 1772-1820¹⁶) の先駆的な活動である。ダーフィズは一七九九年に自費でフランスに赴き、パリでジェンナーの牛痘法を広めていたウィリアム・ウッドヴィル (William Woodville) のもとで学び、オランダで初の牛痘接種を成功させた。一八〇一年、彼はジェンナーの名著『An Inquiry into the Causes and Effects of the Variolae Vaccinae (牛痘の原因及び作用に関する研究)』の翻訳書を刊行しており¹⁷、同年にフランクフルトで出たゴルトシュミットの本に彼が注目したことは容易に想像できる。新しい接種法を普及させるには、医師たちの理解を得るための専門書のみならず、接種を受ける民衆の不安を払拭するために一般向けの啓蒙書も不可欠であった。後者にあたるゴルトシュミットの本の翻訳は、学問上の功績にはならないので、あえて訳者名を記載しなかったのかもしれない。

オランダ語版はドイツ語版と本文の内容は一致しているが、ドイツ語版の附録(「Anhang」¹⁸)および解説付きの参考文献リスト(「Literatur über die Kuhpocken」¹⁹)が省かれており、翻訳不要と判断されたようである。附録の内容は「接種する」という動詞についての考察で、「フランス語では vacciner、英語では to vaccinate が用いられる。ドイツ語で Kuhpocken (牛痘する)」という動詞を作ることができるとが、過去形や受動態では様々な誤解が生じかねないので、他

動詞でよく利用される接頭辞を付けて *bekuhpocken* という新語にすればよいかも知れない」などと書かれている。

四、ゴルトシュミットの参考文献リスト(ドイツ語版、一八〇二年)

Litteratur über die Kuhpocken.

Englische.

Bereits 1795. erschien zu London eine Schrift, in welcher der Kuhpocken und ihrer merkwürdigen Eigenschaft, gegen die Menschenpocken zu sichern, kürzlich gedacht wird. Sie führt im Original den Titel:

I. Observations on morbid Poisons, Phagedaena and Cancer &c. by J. Adams. London 1795.

Joseph Adam's Bemerkungen über Krankheitsgifte, Phagedaena und Krebs u. Aus

附録の第二部では、地元の出版社から刊行されたヨーン・ヴァレンティン・ミュラー (Johann Valentin Müller, 1756-1813) の本に対する反論が述べられている。ミュラーは同じフランクフルトで開業する医師であり、その本の中で「牛の痘瘡は人間の痘瘡と何の関連性もなく、牛痘接種は天然痘に対する確かな予防にならない」などと主張していた²⁶。確かに、ドイツ語の造語法やミュラーの主張への反論もちろんのこと、英語、フランス語、ドイツ語の参考文献リストもこのような啓蒙書に入れる必要はなかった。

三、底本が日本へ伝わった経路について

シーボルトは牛痘導入における自身の役割を少し過大に評価していた²⁷。日本における最初の試みはすでに一九世紀初頭に遡る。一八〇三年に商館長ヘンドリック・ドゥーフ (Henrik Doeff) から教えを受けた通詞馬場佐十郎は、中川五郎治がロシアから持ち帰った牛痘書を和訳して文政三年(一八二〇)に『遁花秘訣』として発表した²⁸。牛痘接種はオランダ領東インドにおいて一八〇四年に導入され、イギリス支配の時代(一八一〇〜一八一六年)から組織的に行われ、一八二〇・二一年のバタビア総督府布告により徐々に徹底されるようになった。

一八〇九〜一三年まで荷倉役として出島で勤務したヤン・コック・ブロムホフ (Jan Cock Blomhoff) は一八一七年に出島商館長に就任し、前任者ドゥーフと同様に牛痘接種に関する啓蒙活動に力を尽くした。一八二〇年には天然痘が猛威を振るつたため²⁴、長崎では種痘への関心は高かった。ブロムホフの日記など多くの関連資料の和訳が、沼田次郎と栗原福也によって発表されている²⁵。

ブロムホフによれば、後にシーボルトに師事する湊長安 (「Minatoo Tjoan」) と美馬順三 (「Zoenzo Kagagawa」²⁹) は一八二三年三月にブロムホフ自身および商館医テュリング (Nicolaas Tullingh) のもとで種痘法について学んだ。天草の牛の間に痘瘡が流行していると聞いた美馬順三はそこに行き

たいと言ひ、天草で牛痘漿を入手しようと考えたようだ。それに対しブロムホフは、牛痘には真種と偽種²⁷があると指摘したが、順三はそれについてはあまりよく分からなかったようだ。順三が参考にしたのは上述のレオナルドウス・ダーフィズが訳した『牛痘の原因および作用についての研究』²⁸だった。ブロムホフは、「その内容が複雑で広範囲にわたるので、牛の真痘と偽痘（「ware en falsche pokken bij de koeien」）や接種法をより早く理解できるように、一八二一年にバタヴィアから出島商館に送られた本を順三に貸し出した」²⁹。

図五 ヤン・コック・ブロムホフ（川原慶賀作ブロンホフ家族図より。アムステルダム国立美術館所蔵）



商館長ブロムホフの指摘はとても重要だった。日本では牛痘の存在さえまだ確認されておらず、牛の乳房にできる、牛痘と似た炎症などもあり、別のものを「真痘」と勘違いしてしまうことも起こり得た。古賀十二郎によれば、佐賀藩の儒学者草場佩川くさばはいせんが牛痘と思われるものを長崎の蘭学者末次忠助（一七六五〜一八三八）に届け、シーボルトの鑑定を頼んだが、真痘ではなかった³⁰。

一八二一年に出島に送られた牛痘書の書名はバタヴィア財務部（Departement van Financien）の資料に記載されている。

「オランダ領東インド財務長官訓令抜粋 バタヴィア 一八二三年五月二〇日

財務長官は日本のオランダ商館長により総督府へ提出された「報告書」第七項の最後の部分に述べられている牛痘苗送付の要請を考慮し、貿易を管轄する財務評議員会で協議し、以下の事項を決定をした。

一 オランダ領東インド財務局長の外科医に対して、次の書面を認めること。

日本駐在の外科医からの種痘に関する報告を貴官に通知した私からの去る一月二〇日付書面第二〇、すなわち在日本の商館長によってなされた日本へ牛痘苗を送るようにとの要請にもとづき、例年行われていると同様に、日本に向けて送付する一定量を準備し、当地へ赴任するフォ

ン・シーボルトに預けるよう手配を願います。

二 在日本の商館長は、一八二一年六月二十八日付決議第一第二項に関連し、上述第一項を通知し、また同決議により、同館長のもとへ送った『牛痘接種史概観』なる書物を来年返却するよう指示すること。³¹

1)『Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting』を読んだブロムホフは牛痘接種の有用性を確信していた。

「私はできるだけはつきり、この有用な発明が人類にいかに関に役立つものであるかということと、また彼らが当地においてこれを実施した最初の人となる、という大きな名声を得ることになるであろうということを教えてやった。

長安は、もしこの試みが少しでも成功を収めた場合には直ちに主人の閣老青山氏に書面で報告し、日本全国にわたって種痘を導入する許可を請うつもりである、と声明した。

私自身この新しい試みの成果を確実にするため、この最初の試験が私の目の届くところでわが商館医師の指導監督の下におこなわれるようにしたととくに理解していた。そのように、彼らの情報は時として、いやしばしば必ずしも十分信頼できないことがあったからである。

こういう理由から私はこの痘漿³²を請求されても与えようとしなかった。それは誤った処置のために、また誤った処置のために生ずる偏見のためにこの有効な手段が無効なものとされないようにするためであった。彼らに必要なラセットをまた、オランダ船が来航した時には痘苗を与えることを約束した。また同時に、接種して好結果を得た人に対しても、それを実施した人に対しても褒美を約束した。またすでに確実な（効果のあった）ものの数について証明書を与えることを約束した。私はそれがうまく行くことを望むものである。³³

当時、出島商館にはすでに痘漿（"stof"）が保管されていたようだ。三月一二日に商館医テュリングはブロムホフ、湊長安、美馬順三らの立ち会いのもと、オランダ人一名と日本人二名に種痘接種を実施した。しかし、この画期的な試みは失敗に終わった。接種後の反応は良いものではなく、八日後に痕の大部分が消失してしまったのである。³⁴

手探り状態の美馬順三らに対して丁寧に対応したブロムホフの功績は大きい。オランダの植民地における牛痘接種の背景には何よりも労働力の確保や地元社会の安定という政治的・経済的狙いがあった。西洋医学の継続的受容が始まった一七世紀中頃以降、知識や技術に加え、文献、道具、医薬品などを提供することは日蘭貿易の「潤滑油」でもあったが、

自ら積極的に動くブロムホフの個人的な善意と使命感は資料から色濃く伝わる。彼の要請に応じて総督府が牛痘接種の導入を承認し、そのための牛痘漿は同年六月に日本へ向けて出港するシーボルトに預けられることになった。

財務長官が言及した『*Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting*』はオランダ領東インドで大いに役に立ったようだ。美馬順三らが閲覧した一冊は一八二四年末にバタビアに返却されているので、その二年後に脱稿した日高涼台の訳本「種痘新書」は原文の写本あるいは新たに日本に届いた刊本に基づいて作成されたと思われる。テュリングとブロムホフの啓蒙活動により、牛痘を導入しようとする医師たちは、真痘と偽痘の区別、接種の方法およびその後の経過という重要な課題についても認識するようになった。

四、民衆啓蒙に力を尽くしたユダヤ人医師ゴル

トシュミット

ここにハイマン・ヨーゼフ・ゴルトシュミット (Heimann Joseph Goldschmidt, 1761-1835) の生涯と功績を概観しておきたい³⁵。彼は一七六一年にドイツ・フランケン地方の小都市バイアースドルフ (Baiersdorf) のユダヤ人家庭に生まれたが、幼い頃両親を失い、東プロイセンのケーニヒスベルク (Königsberg) の伯父に引き取られた。少年の頃から商業より学問を志し、地元の裕福なユダヤ人の支援を受けるよ

うになり、一七八〇年代中頃、ケーニヒスベルク大学に入学した。医学を専攻したゴルトシュミットは、同大学で教鞭を執っていた哲学者カントの講義に感銘を受け、カントからも高評価を得たようだ。一七九〇年八月一三日、彼はヨーハン・ダニエル・メッツガー (Johann Daniel Metzger) 教授の指導のもと、神経病理学に関する学位論文で博士号を取得した³⁶。その後、ベルリン大学病院で勤務し、医療と解剖学の知識を深めた。

一七九二年、南部ドイツの親戚を訪問した際に、帝国自由都市フランクフルト・アム・マインに移住し、当局の許可を受けてユダヤ人医師として開業した。多くの大都市と異なりフランクフルト市のユダヤ人はまだユダヤ人街 (Judengasse) にしか住むことを認められず、ユダヤ人医師の数は四名に制限されていた。幼い頃から差別と貧困とともに助け合いの精神を体験してきたゴルトシュミットは社会に目を向け、市内のユダヤ人病院の創設および学校の運営³⁷に大いに貢献し、ユダヤ人街の住民のための哲学勉強会を開催したりした。

図六 一八六八年頃のフランクフルトのユダヤ人街 (Tr. Gießhofs 撮影)



一八〇一年に市参事会に献じた『牛痘と種痘の概史』を出版した。一八〇八年に彼はカトリックに入信し、Johann Baptist Clemens に改名した。以降彼はフランクフルトの第一区く第三区の「貧民医」(Armenarzt) を務めながら、カント哲学の講義などを通じて民衆啓蒙 (Volksaufklärung) に力を注いだ。一八三二年に卒中発作で倒れ業務を行えなくなり、一八三五年一月に再度の発作でこの世を去った。

当時のヨーロッパの都市は不衛生で一般市民は過密住宅で暮らしていた。天然痘が流行すると多数の感染者や死者を出した。ゴルトシュミットの『牛痘と種痘の概史』は、ヨーロッパにおける牛痘黎明期の激しい論争を牛痘推進の立場から整理し、「我が子の健康と命を大切にす慈愛深い両親のために」当時の疑問や反論にわかりやすく答えている。その序文によれば、医学は経験に基づく学問 (Erfahrungswissenschaft) である³⁹。患者の治療に全力を尽くすことや新しい方法を検証することは医者³⁹の義務である。牛痘接種はすでにそのような検証を受け、人命を救うための有効性が確認された。しかし、それまでの種痘関連の本は医者のために書かれたもので、多くの人々はこの重要なことをまだ知らない。ゴルトシュミットはこの書で自身の経験と観察を踏まえながら、英語とドイツ語の優れた文献に基づいて、一般向けの概要をまとめた。本書はとりわけ真痘と偽痘の説明に力を入れている。接種医がそれに注意しないと様々な問題が生じるおそれがある。ゴルトシュミットは、一七九八年に刊行されたジェンナーの本とそれに対する反響も詳しく紹介している。彼の参考資料のリストには一八〇一年春までに発表された英語、ラテン語、フランス語およびドイツ語の三四点の文献が列記されている。牛痘接種の初期の論争を見事に整理した『牛痘と種痘の概史』は、ただちにオランダ語に訳されて翌年にアムステルダムで刊行された。

五、蘭学者が牛痘接種法に寄せる信頼

日本の予防接種の歴史はヨーロッパと同様に人痘から始まっている。筑前秋月藩医・緒方春朔（一七四八～一八一〇）が『医宗金鑑』（乾隆一四年、一七四九）をもとに開発した改良型の早苗種法（鼻早苗法）が広く普及していたが、同じく明の僧医戴曼公から伝わった池田流の治療法も引き続きよく行われていた⁴⁰。人痘接種を慎重に実施すれば、接種の影響による死亡率は二～三パーセントだったときれているが、江戸時代にはまだ広範囲にわたる関連データもなく、「接種による死亡」という最悪の結果を医師が観察する機会もめつたになかった。その一方、天然痘が流行した場合に接種を受けた人は感染しないということはわかりやすく、ヨーロッパと同様に、人痘接種の有用性を疑う余地はなかった。しかし、人痘と違い牛痘には動物の病気（病原体）を人間に移すという「気味の悪い」側面がある。それを疑問視したり、拒絶する西洋人は決して少なくなかったが、長崎で蘭学を志す医師たちは、意外にも最初から牛痘に積極的だった。当面は牛痘法の優位性を裏付けるものは、出島商館医への信頼だけだったが、テュリングとシーボルトによる接種が失敗に終わっても、この根拠のない信頼は揺らがなかった。

六、有馬撰蔵による全訳

「牛痘新書」の全訳で知られる有馬撰蔵（一八一七～一八四七）は一八四〇年代初頭に長崎で蘭学を学び、四四年に緒方洪庵の適塾に入門した。彼はすぐに才能を認められ、洪庵の岳父（妻の父）億川百記の養子として億川家を継ぐことになったが、三十歳の若さで京都で客死した。長崎の蘭学者上野常足（俊之丞、一七九〇～一八五二）は、硝石製煉所の創設や種々の細工物の製作で名を上げた人物であるが、自身の蔵書の一冊を有馬撰蔵に餞別として贈っている。億川撰三の論文に掲載された写真で、上野常足の蔵書印を確認でき⁴¹るが、この書物の現在の所在は不明である⁴²。

図七 「トルシヒミット『Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken』に見られる上野常足の蔵書印（億川撰三、一九三八年から転載）



有馬撰蔵の訳書では、ゴルトシユミットの序文、緒論、目次および数々の注釈は省かれているが、章立てはオランダ語版とほぼ一致している。下記の訳文は大阪大学適塾記念センター本に基づいている。

○総括

- § 1 Beschrijving van deze Ziekte bij de Koeijen
- 牛痘ノ始原ヲ論ス
- § 2 Van den oorsprong der Koepokken
- 牛痘ノ真仮ヲ論ス
- § 3 Echte en onechte Koepokken bij het Rundvee / § 4 / § 5
- 牛痘自然ニ人ニ伝染スル者ヲ論ス
- § 6 Koepokken door natuurlijke besmetting
- 牛痘自然ニ人ニ伝染スル者ノ経過ヲ論ス
- § 7 Verloop der Koepokken bij de Menschen, door natuurlijke aansteking
- 牛痘ノ偉能ヲ論ス
- § 8 Hoogstmerkwwaardige eigenschap der Koepokken
- 諸危蘭土ニ於テ種牛痘法流布スルヲ論ス
- § 9 Invoering der Koepokken in Engeland
- 種牛痘法ノステラン土⁴³ニ伝来スルヲ論ス
- § 10 Invoering der Koepokken-inenting op het vaste land

○牛痘伝染性ナキヲ論ス

§ 11 De Koepokken zijn niet besmettend

○牛痘ノ種法ヲ論ス

§ 12 Inentings-methode der Koepokken

○牛痘鉞鍼ヲ以テ種スル者ノ経過ヲ論ス

§ 13 Het beloop der Koepokken bij menschen, na de inenting, door een Lancet-steek

○牛痘ノ真仮ヲ論ス

§ 14 Echte en onechte Koepokken bij menschen

○尋常ノ種痘法ト種牛痘法ノ優劣ヲ論ス

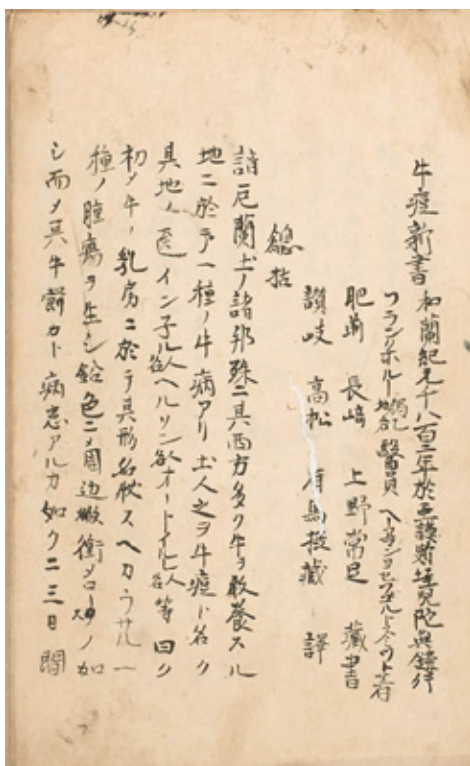
§ 15 Parallele der Koe-en Kinderpokken-inenting, waaruit de voortreffelijkheid der eerste boven de laatste ontegenzeggelijk blijkt

○答難

§ 16 Beantwoording van eenige twijfelingen en tegenwerpingen tegen deze nieuwe inenting

有馬撰蔵訳の「牛痘新書」は刊行本であると考えられる研究者が多いが、その形跡は確認できない。現存するのは、写本のみである。

図八 有馬撰蔵訳の「牛痘新書」(大阪大学適塾記念センター蔵)。



ら生じかねない難点も示している。⁴⁴
日高涼台が一八二五年に執筆した抄訳は三部からなる。第一部の前半はゴルトシュミット本の第三章を、後半は第一章の最重要部分を訳出している。

S 3 Echte en onechte Koepokken bij het

Rundvee (ゴルトシュミット)⁴⁵

「牛の乳房ニ発スル牛痘ノ真偽ノ弁」(日高本)

「牛痘真偽の区別」(森田本)

「牛痘牛乳房上ニ発スル者ノ見證」(辛島本)

「牛痘ノ真偽ヲ分ツ法」(高野本)

S 14chte en onechte Koepokken bij menschen

(ゴルトシュミット)

「表題ナシ」(日高本)

「表題ナシ」(森田本)

「表題ナシ」(辛島本)

「接後牛痘ノ真偽ヲ定ムルノ法」(高野本)

S 12 Inenting-methode der Koepokken (ゴルト

シュミット)⁴⁶

「牛痘傳接ノ奇法ヲ論ス」(日高本)

「表題ナシ」(森田本)

「牛痘傳接ノ手法」(辛島本)

「牛痘傳術」(高野本)

S 13 Het beloop der Koepokken bij

menschen, na de inenting, door een

七、ゴルトシュミットの本の抄訳について

一八二三年三月にゴルトシュミットの本を貸し出した出島商館長ブロムホフは、牛痘接種を志す美馬順三らにとりわけ「真痘」と「偽痘」に注意するよう助言していた。ブロムホフは医師ではないが、ゴルトシュミットの序文を読んで、そのような考えに至ったと思われる。

「真痘と偽痘を区別できるための特徴を正確に列挙することに特に力を尽くした。また、接種方法に極力注意を払わないと、(牛痘接種という)本来は素晴らしいことのために行うものか

Lancet-steek (「ゴルトシュミット」)⁴⁷

「ランセト用テ伝接スルノ後牛痲ノ運症候ヲ論ス」(日高本)

「表題ナシ」(森田本)

「牛痘鉞ヲ以テ種スル者ノ経過ヲ論ス」(辛島本)

島本)

「牛痘病症」(高野本)

文政八年(一八二五)に長崎に赴いた高野長英(一八〇四〜一八五〇)も牛痘接種に強い関心を寄せていた。彼が遺した「牛痘接法 東奥瑞臯訳」の内容は日高涼台訳「種痘書」と一致しているが、様々な言い回しや訳語は日高系の写本と異なっている。しかしゴルトシュミットの本の同じ部分選ばれているので、日高涼台の和訳を参照したと思われる。各写本の文章を比較してみると、中津の「種痘新説」は日高涼台訳を反映していることがわかる。とりわけ森田本との類似性が高い。

【G ゴルトシュミット、一八九二年。K 「種痘新説」

辛島本。M 「種痘書」森田本⁴⁸。H 「種痘新書」⁴⁹ T

「牛痘接法」⁵⁰】

- G 1. De onechten hebben die blauw- of loodachtige verwe niet
- K 一 真痘ニ非ル者ハ青或鉛様ノ色ナシ
- M 一 真の牛痘に非ざる者は青或は鉛□の色

なし

H 第一偽痘ハ青又鉛様色ナリ⁵¹

T 一 偽痘ハ青淡鉛様ノ色ヲナス

G 2. De onechten zijn met geen roosachtigen ontstocken rand ongeven.

K 二 真「痘」ニ非ル者ハ其周圍ノ薔紅色ニナ

リテ焮衝スル事ナシ

M 第二真痘に非ざるものは其周圍の薔薇紅

花色なりて焮痛することなし

H 第二偽痘ハ其周圍薔薇色且ツ焮痛スル證

ナシ

T 二 偽痘ハ痘ノ周圍薔薇色紅色ヲ見ス事ナ

ク又焮痛スル事ナシ

G 3. De onechten veranderen schielijk in eenen droogen schurft. Bij de echten

integendeel vindt deze verdroging eerst later plaats, nadat de ontsteking

verdwenen is.

K 三 真「痘」ニ非者ハ速ニ乾涸シテ痲ト変ス

真ノ者ハ反レ之シテ焮衝已ニ消シテ后ニ始

テ乾涸ス

M 第三真痘に非ざるものは速に乾涸して痲

と変ず真痘のものは之に反す其焮痛漸くに

消して後ち始めて乾涸するなり。

- M 第三真痘に非ざるものは速に乾涸して痲と変ず真痘のものは之に反す其焮痛漸くに消して後ち始めて乾涸するなり。

H 第三偽痘ハ速ニ乾涸シテシテ成ル真痘不然焮痛已ニ消シテ後乾燥ス

T 三偽痘ハ忽チニ乾涸シテ結痂ス真痘ハ否ラス焮痛已ニ消散シテ漸次ニ乾涸ス

G 4. Bij de echten wordt het vee ziek, het verliest den eetlust, en de melk; het welk bij de onechten niet gevonden wordt.

K 四真「痘」ノ者「一」於テハ其牛病シテ食ヲ欲セス乳汁ヲ減ス真「痘」ニ非ル者ハ此證ナシ

M 第四真痘の者於ては其牛病み食を欲せず且つ乳汁を減ず、真痘に非ざるものは之に反す

H 第四真痘ハ其牛ニ悩アリテ食ヲ欲セス其乳汁ヲ減少ス偽痘ニ於テハ此症ナシ

T 四 真痘ヲ発スルトキハ牛病シテ食ヲ欲セス乳汁ノ分泌モ亦減ス偽痘ニハ此徴ナシ

八、中津への伝播について

「種痘新説」がいつ、どのような経路で辛島家に伝わったかは不明である。辛島家の痘瘡学は池田家の流れを汲むものであり、辛島父子が自ら長崎に赴いたとは考えにくい。文政六年（一八二二）から長崎にいた中津藩の村上玄水がこの

ような訳書を写した可能性はある。玄水は文政九年（一八二六）、オランダ商館長スチュレル一行に長崎から小倉まで随行了したこともあり、シーボルトとその周囲の人々の活動をよく把握していたと思われる。残念ながら、村上家には類似の写本は遺っていない。

また、日高涼台が文政一〇年（一八二七）に長崎を発つた後、肥後、豊後を経て、同一一年に伊予宇和島にしばらく逗留し、文政一三年（一八三〇）に大坂に赴いたことも、彼の訳書の普及経路として検討に値する。

いずれにせよ、辛島父子が城下町中津の「精徳堂」で、一七世紀に來日した戴曼公たいまんこうに遡る漢方系の天然痘治療を行いながら、蘭方医たちが検討している新しい接種法にも関心を向けていたことから、彼らの柔軟な知性と医師としての使命感がうかがえる。

【史料】

- ▲「牛痘新書」、有馬攝藏訳、天保十一年〜弘化四年成立、嘉永三年（一八五〇）写（大阪大学適塾記念センター、九州大学医学図書館、京都大学富士川文庫、日文研宗田文庫、佐倉高校記念館鹿山文庫、鹿児島大学玉里文庫、内藤くすり博物館、究理堂、シーボルト記念館）。
- ▲「牛痘接法」、高野長英、成立年不明（『高野長英全集 第一巻』、高野長英全集刊行会編、第一書房、一九七八年、二〇五〜二一四頁）。
- ▲「種痘新書」、日高涼台訳、自筆本、文政八年成立（長崎市シーボルト記念館蔵。『広島県山県郡医師会史』下巻、一一〇〜一一六頁）。
- ▲「種痘新説」写本、書写年不明、書写者不明、辛島医家旧蔵。中津市大江医家史料館所蔵。
- ▲高野長英全集刊行会編『高野長英全集』第一巻（医書）。東京、第一書房、一九七八年。
- ▲Goldschmidt, Heimmann Josef: Allgemeine Übersicht der Geschichte der Kuhpocken und deren Einimpfung als das sicherste und heilsamste Mittel zur gänzlichen Ausrottung der Menschenblattern. Frankfurt am Mayn: Behrens, 1801.
- ▲Goldschmidt, H. J. : Allgemeine beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting, als

het zekerste en heilzaamste middel ter geheele uitroeijing der menschenpokken. Amsterdam: Johannes Allart, 1802.

- ▲Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, Inventaris nr. 236 (Dagregister 1822 november 26 -1823 november 20)
- ▲Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, Inventaris nr. 237 (Dagregister 1823 november 20 -1824 december 7)

【参考文献】

- ▲青木歳幸・大島明秀・W・シヒエル編『天然痘との闘い―九州の種痘』東京、岩田書院、二〇一八年。
- ▲徳川撰三「緒方洪庵門下の三蔵（緒方郁蔵・有馬撰蔵・伊藤慎蔵）について」『医譚』第二号、一九三八年、六〜一五頁。
- ▲織田毅「日高涼台研究序説―主に牛痘法普及における業績について」『鳴滝紀要』第二八号、二〇一八年、六三〜七〇頁。
- ▲蒲原宏「越佐種痘史の諸断面」『越佐研究』第一四集（一九五九）四五〜五八頁。
- ▲古賀十二郎『西洋医術伝来史』長崎、形成社、一九七二年。
- ▲栗原福也「フォン・シーボルト来日の課題と背景」箭内健次、宮崎道生編『シーボルトと日本の開国近代化』、続群

書類従完成会、一九九七年、一五〇六九頁。

一五〇頁。

▲呉秀三『シーボルト先生―其生涯及功業』東京、吐鳳堂書店、一九二六年。

▲富田英壽『種痘の祖緒方春朔』福岡、西日本新聞社、二〇〇五年。

▲西巻明彦「一九世紀初頭の日本における痘瘡対策」。『日本医史学雑誌』、第五九卷第二号（二〇一三年）、一六一―一六三頁。

▲沼田次郎「シーボルトの門人湊長安・美馬順三に関する若干の史料―出島商館長ブロムホフの種痘実験をめぐる」、『シーボルト研究三・四合併号』、一九八五年、二二―三三頁。

▲日高訥児編輯・呉秀三校訂『日高涼台』神戸、日高訥児、一九三〇年。

▲広島県山県郡医師会史編纂委員会『広島県山県郡医師会史』山県郡医師会、一九九三年。

▲松木明知『中川五郎次とシベリア経由の牛痘種痘法』札幌、北海道出版企画センター、二〇〇九年。

▲宮坂正英「シーボルトの日本研究とその支援者としての美馬順三ならびに吉雄権之助」若木太一編『長崎・東西文化交渉史の舞台』上巻、東京、勉誠出版、二〇一三年、二九七―三二二頁。

▲吉田忠「日高涼台の蘭学」。東北大学日本文化研究所『日本文化研究所研究報告』第二三集（一九八九）、一一七―

▲Boomgaard, Peter: Smallpox and Vaccination on Java

1780-1860 – medical data as a source for demographic history. In: A.M. Luyendijk-Elshout et al. (eds.): Dutch Medicine in the Malay Archipelago. Rodopi, 1989, pp. 119-132 (Nieuwe Nederlandse bijdragen tot de geschiedenis der geneskunde en der natuurwetenschappen 35)

▲Boomgaard, Peter: Smallpox, vaccination, and the Pax Neerlandica, Indonesia, 1550-1930. In: Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde, Vol. 159 (2003), no. 4, pp. 590-617.

▲Hirsch, Albert: Das Philanthropin zu Frankfurt am Main. Frankfurt am Main: Waldemar Kramer, 1964.

▲Körner, Hans: Die Würzburger Siebold-Fine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts. Leipzig: J. A. Barth, 1967.

▲Neuer Nekrolog der Deutschen. Dreizehnter Jahrgang, 1835, Theil 2, Weimar: B. Fr. Voigt, 1837.

▲Sachs, J.J.: Medicinischer Almanach für das Jahr 1837. Berlin: C. Heymann, 1837.

注

- 1 (明) 翁仲仁輯著『新刊秘傳痘疹金鏡録』(享保一七年刊)、『池田獨美『重校痘科辨要』(文政四年刊)、『池田家秘書痘疹戒草』(写本、一冊、七五丁)、『池田家流痘瘡唇舌鑑図』(写本、彩色、一六丁)、『精得堂痘瘡良方』(写本、二七丁)、『戴曼公唇口訣』(写本、天保庚子夏写)
- 2 『種痘新説』(写本、成立年不明、一四丁十表・裏表紙、二三×一六七)
- 3 辛島家五代辛島長齡(正庵、蕉庵、東溪。一七七九—一八五七)
- 4 辛島家六代辛島長徳(泰庵。一八一八—一八五九)
- 5 蒲原宏(一九五九)。
- 6 森田千庵の自筆本は一九五〇年代に貸し出された後、行方不明となっている。蒲原の論文のもとになったのは、蒲原自身が作製した写しである。
- 7 森田千庵については蒲原宏(一九五九)参照。
- 8 (長崎にて)一八三三年八月二四日(Jan Cock Blomhoffによるオランダ商館長日記)。(江戸にて)一八二六年四月二三日、二六日、二七日(『NIPPON』一八八頁)。
- 9 蒲原宏(一九五九)、五四頁。
- 10 日高涼台の生涯については、日高訥児(一九三〇)、『吉田忠(一九八九)、『広島県山県郡医師会史』(一九九三)および織田毅(二〇一八)を参照。
- 11 種痘書一卷、埴日高涼台著作集(武田科学振興財団 杏雨書屋、乾六四八)
- 12 丙戌の誤りか。
- 13 織田毅(二〇一八)、六四頁。
- 14 種痘書一卷、埴日高涼台著作集(武田科学振興財団 杏雨書屋、乾六四八)
- 15 吉田(一九八九)、一二五—一二七頁。
- 16 ダーフィズの履歴については、A. J. van der Aar: Biographisch woordenboek der Nederlanden (Nieuwe Uitgaf, Haarlem, Vol. 4, 1858, pp. 76f.)を参照。
- 17 Onderzoek naar de oorzaken en uitwerkselen der Variolae vacinae,

- eene ziekte in de westelijke gedeelten van Engeland ontdekt, voornamlijk in het graafschap Gloucester, en aldaar bekend onder den naam van koepokken; door Edward Jenner [...] in het Nederduitsch vertaald en met een bijvoegsel vermeerderd door L. Davids, Haarlem: Loosjes, 1801.
- Goldschmidt (1801), pp. 111-124.
- Goldschmidt (1801), pp. 125-139.
- Johann Valentin Müller: Beweis, daß die Kuhpocken mit den natürlichen Kinderblattern in keiner Verbindung stehen, und also ihre Einimpfung kein untrügliches Verwahrungsmittel gegen die natürlichen Blattern seyn könne, Publikum zur Beherrzigung gewidmet. Frankfurt am Main: Jäger, 1801.
- Körner (1967), p. 274 (「Ich habe die Vaccine zuerst auf Japan eingeführt」)
- 21 松木明知(二〇〇九)、二一七—二八〇頁、三三三—三六八頁。
- 22 Boomgard (1989); dito (2003), pp. 600f.
- 23 出島商館長日記、一八二〇年五月十三日(Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, nr. 233)。
- 24 沼田次郎(一九八五)、『栗原福也(一九九七)』。
- 25 「Kagagawa」は何かの誤解によるものだと思う。
- 26 上の点に関する沼田および栗原の和訳は誤訳である。「de laatste [=美馬順三] speciaal zeide reeds en beschrijving daarover te hebben, en wilde na Amaya gaan, waar hij verneemde, gehoord te hebben bij de koeien pokken regeerde. Ik maakte hem echter opmerkzaam op de echte en onegte soort, en uit zijn discourses begreep ik, alsdat zijn ideeen ten dezen aanzien nog niet zuiver genoeg waren. Waarom ik hun voorstelde mij het boek eens te zenden, om na te zien」。
- 27 商館長日記、一八三三年三月一〇日。
- 28 商館長日記(一八三三年三月六日、七日、一〇日、一二日、一八日、二〇日)° Nationaal Archief, Nederlandse Factorij in Japan, nr. 236.
- 30 古賀十二郎(一九七二年)、四四六頁。

- 31 和訳は栗原福也（一九九七、二六頁）より。原文は NA, NFJ 552, p. 60.
 「stof」接種物質
- 32 商館長日記、一八三三年三月七日。和訳は沼田次郎（一九八五、二四〇
 一五頁）より。
- 33 「Zoo duidelijk als mogelijk gaf ik hun de nuttigheid te kennen, dat
 deze heilzame uitvinding aan 't menschedom te weeg bragt, en welk
 een grote naam zij zich zouden maken van de eerste te zijn geweest,
 die dit alhier in werking gebragt had.
 Eerstgenoemde betugde van voornemen te zijn, wanneer hen de
 proef aan eenigen gelukt was, direct aan zijn Heer den Rijksraad
 zoude schrijven om eene vergunning overal in 't Rijk hetzelfde te
 mogen invoeren.
 Expresselijk begeer ik de eerste proeven onder mijn oog, en het
 opzigt van onzen Geneesheer geschiede, opdat ik zelf van den uitslag
 verzekerd zoude zijn, alzo soms, en veelal, op hunne berigten niet
 zeer te vertrouwen is.
 Uit die reden heb ik ook geen stof willen afgeven, schoon mij daar
 genoeg om gevraagd is; om door verkeerde behandeling, en daardoor
 ontstane vooroordeelen dit heilzaam middel niet vrugteloos te maken.
 Beloofde hun de nodige lancetten, als de schepen kwamen de stof
 zelve, zoomede beloning voor de voorwerpen die met goed gevolg
 gevaccineerde waren als ook aan hun, als zij hetzelfde in beweging
 bragten, en reed bewijzen van een zeker getal zoude gegeven te
 hebben. Ik hoop dat dit russeeren mag。」(NA, NFJ 236, f. 17)°
 34 商館長日記、一八三三年三月十八日、二〇日 (NA, NFJ 236, f. 18-19)°
 35 「ルトシトマントの生涯にございば、『Neuer Nekrolog der Deutschen』
 (一八三五) および Nekrologische Erinnerungen an deutsche Aeztze
 aus den Jahren 1835 und 1836 (Sachs 1837, pp. 7-9) を参照°
 36 Dissertatio Momenta quaedam ad comparationem pathologiae
 humoralis cum nervosa. Praes. Ioh. Dan. Metzger [...] Autor et
 respondent Heymann Ios. Goldschmidt. Regiomonti, Typis G. L.
 Hartungii, [1780]. (18pp.)
 37 一八〇四年に財閥ロートシルト家の基礎を築いた銀行家 Mayer
 Anschel Rothschild により創設された「Philanthropin 博愛学校」は、
 ドイツで最も有名なユダヤ人学校となった。ユダヤ人でない子どもも受け
 入れられた。詳細については Hirsch (1964) を参照°
 38 『新約聖書』の「ルカによる福音書」に登場する古代ユダヤの預言者
 「洗礼者ヨハネ」°
 39 「De Arzenijkunde is eene practicale, eene ondervindingsleer, dat
 is, zij berust op snijlike beschouwing en waarneeming der natuur。」
 (Goldschmidt, 1802, V)
 40 富田英壽（二〇〇五）および西巻明彦（二〇一三）を参照°
 41 徳川撰三（一九三八）、四五頁°
 42 本論文では大阪大学適塾記念センター所蔵の写本を利用する°
 43 vaste land（ごまり（ヨーロッパ）大陸の意°
 44 Bijzonder heb ik alle vijft aangewend, om de kentekens, waar door
 men de echte Koepokken van de onechten gemaklijk onderscheiden
 kan, op eene bestemde wijs aantetoonen. Ook heb ik het nadeel
 aangewezen, welk voor de goede zaak daarruit onstaat, wanneer
 de Inentings-art niet zijne geheele opmerksaamheid op dit gewigtig
 onderschied vestigt. (Goldschmidt, 1802, X)
 45 Goldschmidt (1802) 五〇七頁、「牛痘新説」一〇四丁°
 46 Goldschmidt (1802) 三四〇一頁、「牛痘新説」五〇九丁°
 47 Goldschmidt (1802), pp. 41-50 「牛痘新説」一〇〇一四丁。ルト
 シトマントが独自にまとめた二二章は、牛痘接種後の日毎の変化に關す
 る初の報告だった°
 48 蒲原宏（一九五九）、五四〇五八頁°
 49 『広島県山県郡医師会史』下巻、一一〇〇一六頁°
 50 『高野長英全集 第一巻』、二〇七頁°
 51 解説の間違ひ°

[表紙]

種痘新説

[一丁表]

§3 Echte en onechte Koepokken bij het Rundvee

Het komt zeer veel daar op aan, dat men, door nauwkeurige waarnemingen en zekere kentekens, de echte Koepokken van de onechten bij de Koeijen onderscheide.

De verdienstvolle Dr. JENNER in Engeland, wendde in het geheim alle mooglijke moeite aan, om eerst deze krankheid bij het Vee nauwkeurig te onderzoeken, eer hij de proeven derzelve bij de menschen in het werk stelde. Na onvermoeide zorgvuldigheid en nauwkeurigheid - welke deze gewichtige ontdekking voor de menschheid ook verdient - bemerkte hij echte en onechte Koepokken bij het Vee. Hij geeft de volgende kentekens op, om ze te onderscheiden:

1. De *onechten* hebben die blauw- of loodachtige verwe niet
2. De *onechten* zijn met geen roosachtigen ontstoken rand omgeven.
3. De *onechten* veranderen schielijk in eenen droogen schurft. Bij de *echten* integendeel vindt deze verdroging eerst later plaats, nadat de ontsteking verdwenen is.
4. Bij de *echten* wordt het vee ziek, het verliest den eetlust, en de melk; het welk bij de *onechten* niet gevonden wordt.

Zulke onechte Koepokken ontstaan voornamelijk in het voorjaar, wanneer de Koeijen in menigte naar de Vee-markten gedreven worden. De Landlieden laten dan dikwerf, uit gewinzucht, des morgens, voor dat de Koeijen uit de stallen gedreven worden, het melken na, op dat de Uijers een groter en schoner aanzien mogen hebben, en dezelve uit dien hoofde duurder verkogt worden. Een gedurig gevolg daar van is, dat eene ontsteking plaats vindt, die zich in een uitslag aan de Tepels en Uijers eindigt, en den Melker eene mislijke krankheit aan de handen, armen en schouderen mededeelt. Menigmaal wordt daarmede ook het voorhoofd besmet; wijl de knecht zich daarmede, bij het melken, aan den Uijer leunt. Deze krankheit kan zich bij een en denzelfden perzoon herhaalde malen openbaren;

牛痘牛乳房上ニ発スル者ノ見證

一 真痘ニ非ル者ハ青或鉛様ノ色ナシ

二 真ニ非ル者ハ其周圍ノ蓄紅色ニナリテ焮痛スル事ナシ

三 真ニ非者ハ速ニ乾涸シテ痂ト変ス真ノ者ハ反_レ之シテ焮痛已ニ消シテ后ニ始テ乾涸ス

四 真ノ者於テハ其牛病シテ食ヲ欲セス乳汁ヲ減ス真[痘]ニ非ル者ハ此證ナシ

此ノ如キ證ノ真ニ非ル痘ハ別シテ春時ニ多ク牝牛ヲ市ニ率キ出ルトキニ発ス其誤ハ利ヲ貪ル者[一丁裏]トモ牛ヲ賣ルニ朝乳絞ル事ヲ止メテ市ニ出テ其乳房ノ脹リテ美ニシテ好價ヲ得_シ事ヲ欲ス

故ニ乳汁滞リテ此ヨリシテ焮痛ヲ発シ終ニハ乳房乳頭等ニ瘡ヲ発シテ乳汁ヲ取_{【(喰食)】}下賤ノ者牛肘等或額ニ傳染ス其額ニ傳染スルハ額ヲ乳房ニ觸ルヲ以テナリ此瘡ハ一人ニシテ數廻発スレトモ嘗テ痘ヲ坊クノ功ナシ

nooit echter wordt zij een behoedmiddel tegen de pokken.

Nog eene soort *onechte Koepokken bij het Vee*, heeft haaren oorsprong van eene bijzondere soort Vliegen, die in de Tepels der Koeijen bijten of steken. Ook deze soort is niet in staat, de pokbesmetting voortekomen.

§14 Echte en onechte Koepokken bij menschen

[...] Door de volgende tekenen laten zich de *onechte Koepokken* van de *echten* bepaaldelijk onderscheiden.

1.) De waare en echte Koepokken komen, na de inenting, langzaam ten voorschijn; zo dat men dikwerf tot den derden dag nog onzeker is, of de inenting gevat heeft of niet.

Bij de *onechten* integendeel bespeurt men eenen snellen voortgang. De inentingsplaatsen zijn reeds den tweeden dag ontstoken.

2.) Bij de *echte* Koepokken bemerkt men altoos tusschen den zesden en twaalfden dag eene, nu sterkere dan zwakkere, koorts, 't welk tot bewijs verstrekt, dat nu het gift ingezogen is, en het gansche lichaams-gestel aangegrepen heeft.

Bij de *onechten*, intusschen, wordt of in 't geheel geen spoor van eene koorts ontdekt, of 'er onstaan reeds op den tweeden dag, met de ontstokene inentings-plaatsen, ligte koorts-achtige bewegingen, als gevolgen van een plaatslijk kwetzuur, die even zoo spoedig weer verdwijnen, zonder dat het geheele lichaams-gestel 'er in deelt.

3.) Bij de *echte* Koepokken ontstaat, om de Ent-puisten, tusschen den agtsten en elfden dag altoos eene levendige peripherische roodheid, die naderhand, even zoo langzaam, als zij ontstond, wederom afneemt.

Bij de *onechten* wordt deze karakteristieke roodheid of in 't geheel niet bespeurd, of zij verschijnt reeds op den derden en vierden dag – zij is minder levendig en verdwijnt ook schielijk weder.

4.) De verloop der *echte Koepokken* duurt ten minsten veertien of vijftien dagen.

De *onechten* integendeel zijn menigwerf reeds op den zesden dag verdroogd.

5.) De *echte Koepok* heeft altoos eene eigenaartige gedaante; zij krijgt, naamlijk, met den vijfden dag bepaaldelijk in het midden eene deuk (*delle*), terwijl de randen zich daartegen steeds meer en meer verheffen.

Bij de *onechten* wordt integendeel deze regelmatige form niet waargenomen.

猶一種ノ偽牛痘ヲ発ス事アリ其原因ハ一種ノ蠅アリテ乳頭ヲ螫シ吸フヨリ発ル此等ノ種類ノ瘡ハ皆痘瘡傳染ヲ垢クノ功ナシ〔二丁表〕

〔表題無し〕

牛痘人身ニ接シテ発スル者ノ真偽ノ微候此下ニ擧ル^(微)候ニテ人身牛痘ノ真偽分明ニ分ル別セラ

第一 真ノ牛痘ハ接傳ノ后徐々ニ発見ス故ニ每接傳ノ后三日ヲ徑テモ其感セシヤ否ヲ決定シカタシ真ニ非ル者ハコレニハンシテ速ニ発作シ接傳ノ痕第二日目ニ直ニ焮痛ヲ発スルナリ

第二 真ノ者ハ接后第六日ヨリ第十二日マテノ際ニ於テ時ニ劇シク時ニ微ナル熱ヲ発スコレ即其種子ヲ體中ニ吸收シ混身ニ順流スル〔二丁裏〕ノ微ナリ

真ニ非ル者ニ於テハ然ルニ或ハ全ク熱状ヲ見サス或ハ巳ニ第二日ニ其接痕ノ焮痛ト共ニ微ニ熱状ヲ発シテ打撲處ノ如^(中)其熱ハ速ニ消散シテ惣身に蔓ル事ナシ

第三 真牛痘ハ第八日ヨリ第十一日マテノ際ニ於テ接痕ノ周圍ニ常ニ治潑タル紅輪ヲ発ス此紅輪其后其初ニ起レルトキノ如クシ徐々消散ス真ニ非ル者於テハ此紅輪全ク発ル事ナク或ハ第十三四日ニ已ニ發見シ又消散スル事モ甚速ナリ〔三丁表〕

第四 真牛痘ノ日数ハ少クトモ十四五日ナリ真ナラサル者ハコレニ反シテ毎ニ第六日ニハ乾固ス

第五 真牛痘ニハ常ニ定リノ形状アリ即第五日ヲ以テ瘡ノ中点少シ凹下シ其周圍ハ反テ次第々々ニ高起ス不真ノ者ハ反レ之テ其形状ヲ為ス事ナシ

6.) De Materie der *echte Koepokken* blijft dikwils tot den elfden dag water helder an klaar.

De Materie der *onechten* daarentegen wordt aanstonds bij de forming der Pokken etterachtig.

7.) De *echte Koepokken* ontaarten nimmer in sterk-vloeiende en lang-aanhoudende zweeren.

Het welk echter bij de *onechten* menigmaal het geval is.

Dr. JENNER geeft, in zijne voortgezette waarneemingen, de volgende bronnen op, waaruit onechte Koepokken, die in geen deele voor eene toekomstige besmetting beveiligen, kunnen ontstaan.

1.) Wanneer men met gift inent, 't welk uit puisten aan een Koei-uijer genomen wordt, die geen specifieke Koepokken-gift bevatten. – (Ik heb boven uit de Jennersche schriften de kentekens opgegeven, waardoor men bij de Koeijen de echte Pokken van de onechten onderscheiden kan.)

2.) Door Materie, die wel oorspronkelijk specifiek gift in zich bevattede, maar door vuiligheid of andere, weinig in het oog vallende oorzaken, eene verandering ondergaan, of eenen lelijken reuk aangenomen heeft. (Eene echte en goede Koepokken-materie toch, moet geen den minsten reuk van zich geven.)

3.) Door Materie van eene Koepok in eenen overrijpen toestand, (dat is, wanneer de materie niet mehr water-helder maar reeds etterachtig is.)

Bij deze van Dr. JENNER aangevoerde bronnen, voeg ik nog de volgende:

4.) Wanneer uit de Koepokken van een Perzoon, die reeds voorheen de Kinder pokken gehad heeft, geënt wordt.

Dr. PEARSON³ heeft wel door zorgvuldige Proeven bewezen, dat de inenting met Koepok-gift bij Perzonen, die reeds de Kinderpokken gehad hebben, geenzins de eigenaartige ziekte voortbrengt. Intusschen kunnen toch bij zulke Perzonen, door de inenting met Echt-koepok-gift, plaatselijke Pokken voortgebracht

第六 真牛痘ノ種子ハ毎ニ第十一日マテ清水ノ如クニテ存在ス不真ノ者ノ種子ハ発瘡ノ初メヨリ膿状ニアリ [三丁裏]

第七 真牛痘ハ嘗テ強キ潰流シ長患スルノ潰瘍ニ変スル事ナリ

真ニ非ル者ハ毎ニ右ノ患ヲ致スナリ名医エンネル¹自ノ經驗ヲ以テ此下ニ擧ル所ノ痘ヲ坊クノ功ナキ非真ノ牛痘ノ発スル本源ヲ^[防]
■^[虫食] 2 セリ

第一 若人真ノ痘種ヲ合マサル牛乳房上ノ瘡ヲ取テ傳接スルトキハ発之牛痘ノ真偽ノ見察ノシヤウハ己ニ上ノコレヲ擧タリ [四丁表]

第二 ニハ其源ハ真痘種タリト雖或ハ不際ニ汚シ或他少シノ事ニテモ其種子ヲ變性セシテ或ハ悪キ真ノ物ヲ以テ薰シタルモノニテ傳接スルトキハ発シ真ノ痘種ハ少シモ香臭ナシ

第三 若シ熱シ過セル種子ヲ以テ接スルトキハ発ス熱シ過ストハ清水状ノ種子変シテ足ニ膿状ニ至ルモノヲ云右エンネルノ經驗ナリ右ノ外ニ我尚下ノ條ヲ加ヘ擧ン

第四 若シ己ニ真ノ痘種ニ患タル者ニ牛痘ヲ接 [四丁裏]セルモノヨク種子ヲ取りテ接スルトキハ発之名医ペアルソン至テ密ニ試テ后人ニ示シテ曰己ニ真ノ痘ヲ患タル者ニ牛痘ヲ接シテ其種子ヲ取りテ接スルトキハ決シテ真ノ牛痘ヲ発スル事ナシ然レトモ其ノ己ニ真牛痘ヲ患タル者ニ於テ真ノ牛痘ノ種子ヲ用テ接スレハ瘡ヲ発スル事ナク然リト雖其種子ノ性質變シテ真ノ牛痘ヲ発セス何ントナレハ其人ノ體中ニ含ム所ノ痘ヲ感

1 Edward Jenner (1749–1823)

2 「示」(森田本)

3 George Pearson (1751–1828)

worden, welkers materie echter de oospronglijke soortelijke eigenschap des Koepokken-gifts even daardoor geheel verloren heeft; dewijl dezelve in een lichaam voortgebracht wordt, 't welk de vatbaarheid vor de Kinderpokken reeds benomen is. Het in menschen voortgebrachte echte Koepok-gift behoudt zijne specifieke eigenschap door alle generaties heen. Het moet echter altoos in zulke lichamen voortgeplant worden, waarin het steeds de vatbaarheid voor de natuurlijke Pokken, – met welke het zich, om zoo te speken *neutraliseren* kan, – aantreft. Wordt het in tegendeel voortgeplant in een lichaam, 't welk deze vatbaarheid, door de voor afgegaane natuurlijke, in ingeënte waare Kinderpokken reeds verloren heeft, zoo verliest het zijne specifieke kracht; en zal, zoo wel in deze, als volgende subjecten, een valsch soort van Koepokken – welke niet meer de eigenschap bezitten om tegen de natuurlijke te beveiligen - voortbrengen.

§12 Inentings-methode der Koepokken⁴

Wil men deze weldadige inenting allereerst in eenen Oord invoeren; zoo moet men het gift, uit den naastgelegen Oord, daar deze inenting, met goed gevolg ingevoerd is, komen laten. Men wende zich deswegen tot ervarenen Mannen, van wier getrouwheid en ijver, om tot welzijn van het menschdom te zijn, men nauwkeurig overtuigd is. 'Er is in dezen de uiterste voorzichtigheid aan te bevelen. Ook moet zulk een, die voornemens is, deze heilzame inenting allereerst in eenen Oord intevoeren, de echte *form* en *het beloop* der Koepokken recht kennen, en bij zijne eerste Inentelingen zeer nauwkeurig daarop letten, of 'er ook wel eene waare karakteristieke Koepokken-entpuijst ten voorschijn kome, ten einde 'er geen gelegenheid terverbreiding van valsche en onechte Koepokken gegeven worde.

Men bewaart het gift gemeenlijk tusschen twee kleine glasplaatjes, zijnde in het midden van het eene, eene kleine holrondeheid (*concauiteit*) ingeslepen. In deze verdieping doet men een klein weinig met versche materie door en door bevochtigde boomwolfe, of Engelsche charpie. Deze beide glasplaatjes moeten nauwkeurig en vast op alkanderen sluiten; waarom het goed is, dat zij op de eene kant dof geslepen worden;

シ受ルノ質已ニ真痘ニテ奪ワレアル故ナリ [五丁表] 人体中ヨリ出タル真ノ牛痘種子ハ其一種ノ性能ハ幾傳接ニテモ變セスツナリ然レトモ常ニ未痘ノ人ニ於テセスンハアル可カラス已ニ自然ノ痘瘡ヲ患タル者及接痘法ヲ行テ其痘毒ヲ受ク可キ質ヲ失セル者ノ體ニ傳ヘテ出来タル牛痘ノ種子ハ固有ノ能力ヲ失フ終ニ偽痘ノ種子ト變シテ痘瘡ヲ受ク事功能ヲ為スコトナシ

牛痘傳接ノ奇法

此ノ牛痘傳接ノ奇法ヲ始テ國ニ傳ヘント欲セ [五丁裏] ハ必ス其近國ノ已ニ此ノ法ヲ傳リ功能著シク行ワル所ヨリ其種子ヲ將來セスンハアラス然ルニ其術ニ委シキ人ヲ得トキハ國人ノ為トナル事決セリ又其ノ上ニモ其始テ此法ヲ國中ニ傳ル人ハ其瘡ノ真ノ形狀及其成リ行ノ容跡ヲ正シク誌リテ其ノ最初ニ傳接セル患者ニ仔細ニ心ヲ用テ真ノ痘ヲ發ルヤ否ヲ察シ偽痘ノ流行ノ源ヲ發カスルヤウニスヘシ

常法其ノ種ヲ貯ルニハ二片ノ硝子板ヲ用ヒ其 [六丁表] 心ヲ少シク凹ニ磨リ其中ニ種液ヲ少許リヲ木綿或繖糸等ニ浸シテ内ル俱此両片ノ硝子板ハ至密ニ合セシメスンハアラス故ニ其周縁ノ處^(中) 砂磨リスルヲヨシトス扱其両片ヲ至密ニ合シテ外氣ヲ^(閉)坊ク為ニ真上ニ細製ノフエルニス⁵ (物ヲヌルモノノ膠漆ノ屬) ヲ塗リテ真上ヲ特牛ノ膀胱ヲ以テ同

4 Goldschmidt (1802)、三四～四一頁、「牛痘新説」五～九丁。

5 オランダ語 vernis、ニス

vervolgend bindt men ze stijf te zamen. Ter weering van de buitenlucht, doet men 'er een fijn vernis, (*Colophonium*) of zegel-lak op, en overtrekt ze met eene week gemaakte zachte kalfsblaze of met eene andere geschikte, klevende substantie. Men opent dezelve niet eerde, dan bij de inenting, wanneer men de materie weder uit de boomwolfe perst en aan de punkt van het Lancet of de inentingsnaald brengt.

Men maakt in 't midden van ieder boven-arm onder de *Delta-muskel drie*, een halven duim van elkaer verwijderde, ent-steeken, in de gedaante van een drie-hoek, of *vier* in de gedaante van een vier-hoek. De steeken moeten geheel plat onder het bovenhuidje gemaakt worden, ten hoogsten twee Linien diep, zoo dat, indien 't mogelijk is, eerst eenige secunden na den steek een droppeltje bloed ten voorschijn kome.

Dr. WODWILLE geeft nog het volgende voorschrift: „wanneer men met vloeibare materie“, zegt hij, „inent, zoo moet men het Lancet bijna recht-hoekig aan het huid brengen, op dat de materie op de punt van het instrument zakke, warmede men dan, in deze houding, het bovenhuidje herhaalde malen voorzichtig opscheurt, tot dat men de eigentlijke huid bereikt, en het instrument zich met bloed verft. Deze manier heeft de voorkeur boven de gewone steeken, en ik hebbe ze geschikter en doelmatiger dan de andere gevonden.“ Het is zeer goed, dat voor de inenting, de arm in laauw water gebaad, of met warme Flenel gewreeven worde.

Heeft nu het gift bij eenige Perzonen gevat, en zijn daarop de echte Koepokken ten voorschijn gekomen; zoo moet men, zo veel mogelijk, op de bewaring van het gift bedacht zijn. Men laat, indien het mogelijk is, bij geen sujet deze, voor het menschdom zoo weldadige, vochtigheid nutteloos verdrogen. Men ent vervolgens, daar het geschieden kan, steeds me versche materie van arm tot arm in, nadien deze manier van inenten nooit, of ten minsten zeer zelden mislukt.

Het beste tijdstip om uit een entpuist verder inteën, is, wanneer de laagte (*delle*) in 't midden nog niet geheel verdweenen is, en de materie in de verhevene randen, nog dun en waterhelder is. Is echter de

封シ或ハ冑ニ適フ粘糊ス^[中倉]葉ヲ以テ同封シ
用ルトキハ當テ始テ開キ其液ヲ再ヒランセ
ト⁶或傳接ノ為ニ作りタル針ノ鋒ニ染シム
ルヘシ [六丁裏]

傳接ノ法ハ臍上ニ其鍼ヲ用テ鼎足状ニ三處
三角ニ其間三指半径ヲ隔テ接ス若四鍼ヲ接
スル者ハ四角ニ形ニ接ス其鍼ヲ刺ス事ハ皮
下ヲ横サマニ刺スヘシ其深サヲ二^[中倉]ニ過
ナシムヘカラス能ス可クハ一二秒ノ后始テ
一二滴ノ血ヲ見ルヤウニナス可シ

名医ウートウ井ルレ曰若シ人ノ流動シテ種
液ヲ以テ接スルトキハランセトヲ豎ニ執テ
皮上ヲ數廻搔キ破ルヤウニシテ表皮下ニ達
シテ刀鋒ガ少シク血ニ染ムニ至ルヘシ然
ルトキ流動ノ種子 [七丁表] 其鋒尖ニ流レ行
テ皮下ニ徹ス此法ハ諸ノ常尋常ノ法ニ勝レ
リ傳接ノ以前ニ其臍ヲ温湯中ニ浴シ或暖メ
タル巾ヲ以テ摩スル事甚好シ

若シ傳接ノ后真ノ牛痘發見スルトキハカヲ
盡シテ其種子ヲ取り貯ル事ニ心ヲ用スンハ
アラス必ス此人間ニ大功アル液ヲ無益ニ乾
個セシムル事ナカレ若シナル可クハ常ニ此
新治ノ種液ヲ以テ臍ヨリ臍ニ傳スヘシ此ノ
傳接ノ法ニ申ルトキハ [七丁裏] 嘗テ誤ル
ナシ

種子ヲ取り傳接スル為ニ最上ノ時分ハ其瘡
ノ中心凹ニシテ周圍腫脹シ其中ニ水ノ如キ
清液ヲ含メルノ時ナリ若シ其ノ液已ニ^[粘稠]

6 オランダ語 lancet、刃針

7 「分」(森田本)

materie reeds taai en etterachtig geworden; zoo is zij tot verdere inenting van geene nuttigheid meer. Zulk eene etterachtige materie kan nog wel plaatselijke zweertjes ten voorschijn brengen, die echter geene zweeren van het characteristieke der Koepokken openbaren, en dus ook voor eene toekomstige pok-besmetting in geenen deel beveiligen kunnen. – De 6de, 7de, 8ste en 9de dag, na eene welgelukke inenting, zullen dus de beste dagen ter opvang van het gift – tot verdere inenting – zijn. Daar, intusschen, eenige ent-puisten zich in haaren loop dikwerf een of twee dagen vertragen; zoo kan uit zulken nog op den 10den en 11den dag ingeënt worden. Indien nu, onaangezien alle nauwkeurigheid en voorzichtigheid, evenwel de eeste inenting mislukken mogt; zoo moet men zich niet laten afschrikken, om dezelve, na verloop van eenige dagen, te herhalen. 'Er heeft menigmaal, al zijn ook alle overige omstandigheden wel, bij een subject eene ogenblikkelijke, niet in den zin vallende, oorzaak plaats, die het vatten der inenting verijdelt.

Veele Doctoren hebben opgemerkt, dat bij kinderen, welker huid-organ eene scherpigheid openbaarde, de inenting niet zoo ligt vatteden, als bij zulke, die eene geheel zuivere huid hadden. Ik hebbe zulks alleen maar bevestigd gevonden bij Zuigelingen. Bij meer gevorderde subjecten scheenen mij de huid-scherpigheden geenen groten invloed op de Inenting te hebben. Ook is, mijns erachtens, eene onmerkbare kampachtige te zamentrekkin der inzuigenden huidvaten, juist ten tijde der inenting, dikwils eene oorzaak van het mislukken derzelfde.

Het gebeurt menigmaal, dat van 6 of 8 ent-steeken, slechts *éénigen*, of in 't geheel maar *één éenige* ent puist ten vorschijn komt. Dit verontruste de ouders in 't minste niet. Het is genoeg, wanneer slechts *één* steek beklijft, en slechts *één* characteristieke Koepok, haaren echten verloop gehad heeft. Waren wij vooraf overtuigd, dat ieder ent-steek vatten zou, dan konden wij ons bij iedere inenting slechts met *één éenigen* steek vergnoegen.

Men kan ook de sinet-stoffe gedroogd bewaren: of tusschen 2 glaas-plaatjes; of op lapjes en Engelsche charpie (pluksel), of men

ニナリ膿状ニ変スルトキハ其ノ種子已傳接ノ能力ヲ失ス此ノ膿ニナレル種子モ亦一ノ潰瘍ヲ発ル事ヲ能フ然レトモ其ノ真ノ牛痘ノ能力ヲ失スル故ニ真牛痘ヲ痘ヲ發スル事不能事是ヲ以テ真ノ痘瘡ノ傳染ヲ坊クノ功ナシ傳接后六七八九日ノ間真痘ノ種子ヲ取リテ再[八丁表]傳ニ用ル為ノ最上ノ時ナリ然ルニ證ニヨリテ一兩日瘡ノ進行ノ遲滯スル者モアルニ由リテ十日十一日ニ至テモヨキ者アリ心ヲ用テ細密ニ傳接ノ法ヲ施ト雖初ノ傳接功ナキ事アルニヨリテ必ス數日ノ后施ス事ヲ厭フ不可毎ニ惣テ少シモ傳接ノ坊ヲナスノ著シキ同ナシト雖最微ノ固アリテ之ヲ坊クル事アリ

衆医皆以為ク皮上ニ竦ノ毒瘡ヲ發セル小兒於テハ皮上清キ兒ヨリハ傳接ヲ感シ難シ但シ正皮上ノ全ク清キ事ハ乳子ニ於[八丁裏]テノシコレヲ定カニ見ル多クノ經驗ニヨリ見ルニ皮辛辣毒ハ傳接ノ大害ヲサス但隱微ノ掣鬚皮上ノ吸尿管ニ在ルヨリテ接痘ノ害ヲ為スナリ

第六或八日ニ至テ毎ニ僅ニ一ニノ接痕上
(虫食) ■ ■ ノ小瘡状ヲ為ス事アリコレ驚クニ足カ
(虫食) ■ ス只一ノ真牛痘ヲ生シテ其真症候ヲ見 ■
(虫食) トキハ十分ナリ是ニ固テ若シ每接痕ニ感受スル事ヲ決得ルナラハ一人一處ニシテナナルヘシ[九丁表]

其種子ハ或ハ二片硝子救問ニ滴著セシメ或ハ小片巾或ハ水綿花絲暗危利亞⁸ 繖絲ニ膿

8 Anglia、イギリス

bevochtigt boomwollen draden met etter, laat ze drogen, en bewaart ze in dicht geslotene glazen. Voor de inenting wordt nu deze gedroogde materia met een weinig speekzel of koud gedistilleerd water bevochtigd, en op het Lancet gebracht. Met damp, of zelfs kokendwater de materie week te maken, vin ik niet raadzaam, wijl daardoor het vlugge besmettende gedeelte des gifts, ligtelijk kon verloren gaan.

Men kan ook door kleine van 4 tot 6 Linien lange insijdingen, in welken met etter bevochtigde wolle draaden gelegd worden, inenten; of door middel van een Spaansche-vlieg¹⁰ -pleister. Intusschen is de manier, om het gift onmiddelijk door een Lancet-steek bij te brengen, verree de zekerste, en, wanneer het met de vereischte voorzichtigheid gedaan wordt, het minst smertelijk. Het is hoogstnodig, na iedere inenting, wanneer men niet aanstonds tot andere inenting overgaat, de punten der Lancetten zorgvuldig te zuiveren van al het, daar nog aanklevende, gift, wijl 'er zich anders ligtelijk roestvlekken kunnen aanzetten, die bij een toekomstige inenting, eene te grote prikkeling konden veroorzaken.

ヲ浸シテ乾潤セシメテ硝子板間ニ密封ス傳接ヲ行フノ時ニ當テ先ツ之ヲ唾津或蒸露製冷水ヲ以テ潤和シテ刀上ニ滴スヘシ沸湯ノ蒸氣或ハ[湯ヲ以テ⁹⁾]種子ヲ潤ス事ハ宜シキニ適ハス其故ハ温氣ニヨリテ種子ノ揮發ノ部分ヲ^(患處)散セシムルナリ

傳接ヲ行フニハ或四分ヨリ六分至ル長サノ小割ヲ皮上ニ作り種子ヲ以テ潤シタル綿花絲[九丁裏]ヲ其上ニ傳テ小キ發泡ヲ為シテ其痕上ニ傳接ス但シ直ニランセト¹¹⁾ヲ以テ傳接スル事最モ勝レリトス且ツ此法ヲ心ヲ用テ行フトキハ痛楚モ^(ホ)最少シ若シ人ノ相繼テ直^(ニ)傳接スルニ非ルトキハ每接セ^(セ)ト鋒ヲ仔細ニヌグヒ温メテ種子ノ余リノ糊著セルモノヲ去¹²⁾ル事ヲ要ス否レハ其刀鏽ヲ生シ易シ其鏽^(トキニ)兒ニ接スルトキハ皮中ニ止ルトキハ痘ノ發スル^(トキニ)臨テ甚シキ刺激ヲ為スナリ[一〇丁表]

9 文脈を参考に補った。

10 青斑猫(Lytta vesicatoria)

11 オランダ語lancet、刃針

12 去

§13 Het beloop der Koepokken bij menschen, na de inenting, door een Lancet-steek.¹³

Om den 2den dag na de inenting, bemerkt men roode puntjes, bijna gelijk aan de vlooi-steeken, op welke men de zeer kleine plaats des steeks ziet. Dikwerf ziet 'er de steek, op dezen dag, nog als een gewoone uit, en wordt op den volgenden dag eerst rood. Zomtijds openbaart zich de eerste roodheid ook eerst op den 4den of 5den dag, en aan den eenen steek eerder, dan aan den anderen. (Tweemaal bemerkte ik, dat de inenting juist daar mislukte, waar reeds op den 2den dag alle ent-steeken rood verscheenen, op den 3den en 4den dag verdwenen deze roode puntjes gezamentlijk, en 'er kwam in 't vervolg niets weder te voorschijn. Daar ik integendeel bij eenen langzamen gang, wanneer de ent-steeken zich eerst op den 3den dag, als roode ontstokene puntjes vertoonden, bijna altijd de schoonste ent-puisten zag volgen.)

Derde dag. Als de vorige. Zomtijds reeds een fijn knopje op de plaats des steeks. (Zomtijds vertoont zich dit kleine knopje, zonder dat het roode puntje vooraf gegaan is.)

Vierde dag. Een klein bleek-rood knopje op iederen gevatteden ent-steek. (Zomtijds blijft dit knopje heden nog zonder alle roodheid.)

Vijfde dag. Het knopje iets groter en aan de spitse ingedrukt, en de randen dus verhevener. Wanneer men dit ziet, kan men bepaaldelijk zeggen, dat de inenting gevat heeft. Bij menigen Inenteling bemerkt men nu reeds eene geringe algemene werking op het lichaam, bij voorbeeld, eene bleeke gezichts-koleur, hitte in de handen, onrustigen nacht zachten zweet. (Het is echter toch zeer zelden, dat men reeds op dezen dag koorts-achtige bewegingen bespeuren zou. Alleen bij zeer gevoelige en prikkelbaare subjecten vindt dit wel eens plaats.)

Zesde dag. De ent-puisten groter, De randen verhevener. Gevolglijk ook in 't midden de induiking duidelijker.

Zevende dag. De ent-puisten bevatten reeds eenige Lymphe (helder vocht) in zich, en hebben een hel-rood, bijna doorschijnend aanzien; aan de randen is de roodheid op 't levendigste. (Ik heb dikwils reeds op den zesden dag Lymphe uit

牛痘鉸鍼ヲ以テ種スル者ノ経過ヲ論ス

人身ニランセトヲ以テ接シテ后ノ牛痘ノ運行接后第二日ニハ接痕小紅点ヲ發シテ蚤螫痕ノ如シ又毎ニ此日ニ於ハ只尋常ノ小刀痕ノミアリテ次日至テ始テ紅点ヲ發スル事アリ時トシテハ又第四日第五日ニ至テ紅ヲ發シ或ハ一痕他ノ諸痕ニ先ツテ發スル事モアリ我又第二日已ニ紅ヲ發シ第三四日ニ至テ悉消失シ以後再ヒ何モ發セスシテ傳接ノ功空シカリシ事ヲ見タル事二次アリ然ルニ我運行ノ徐ニシテ第三日ニ始テ紅ク發スル者ハ反テ常 [一〇丁裏] ニ傳接ノ全功ヲ奏スルヲ驗ス

第三日 始前日時トシテハ已ニ微小ノ腫ヲ傳痕上ニ發スル事アリ時トシテハ此小腫未紅点ヲ見スシテ已ニ發スルモノアリ

第四日 已ニ感受セル痕毎ニ淡紅色ノ小腫ヲ發ス時トシテハ此小腫此日ニ至テ尚未紅色ナキ事アリ

第五日 其小腫漸大キクナリ其接痕ノ處少シク凹陷シ周圍腫脹ス若人此ノ候ヲ見ルトキハ傳接已ニ感受セリト決シ言フ能フ事多人ヲ傳 [一一丁表] 接セル中ニ於テ此時惣身ニ種子ノカノ及フモノヲ見タリ即顔色青サメ牛 ([五]) 心煩熱シ夜寢安カラス微汁出者ノ症ナリ然レトモ第五ノ日ニ如此ノ熱狀ヲ發スル事至テ稀ナリ但甚知覺ノ尖ク刺激シ易キ生質ノ兎ニ此症發スルナルノミ

第六日 接痕弥大キク其周圍強腫脹シ中点ハ隨テ著シク凹陷ス

第七日 瘡中已ニ小許ノ清液ヲ生ス其周圍ハ始ント透明ニシテ紅ナル色ヲ發ス此紅色ハ此日ヲ [一一丁裏] 極美トスル事我毎時第六日ニ已ニ種子ヲ取りテ傳接セシ事アリ

13 Goldschmidt (1802), pp. 四一~五〇頁、「牛痘新説」一〇~一四丁。ゴルトシュミットが独自にまとめた一三章は、牛痘接種後の日毎の変化に関する初めての報告だった。

eene grote geneigdheid tot zweeten; weshalven men hun, om dezen tijd, zeer voor verkoudingen in acht nemen moet: ook zomwijlen een aanstoot van hoesten en ligten buikloop, (*Diarrhœe*). Deze toestand duurt gewoonlijk één, ook wel twee dagen.

Twaalfde dag. De cirkel-ronde en zeer hevige ontsteking om de ent-puisten, neemt zoo wel in grootheid als hoedanigheid merkkelijk af. De Pokken zelfs verliezen haar waterachtig aanzien; worden stijf, spek- en atterachtig, en krijgen een wit-geelachtig aanzien. In het midden van dezelve vertoont zich een kleine korst. Deze verschijnzelen openbaren zich dikwils reeds op den elfden dag.

Dertiende en veertiende dag. De koorts, welke op den elfden en twaalfden zich in 't midden der ent-pokken begonnen had te vertonen, verspreidt zich steeds meer en meer naar de randen van dezelve, de vochtige materie verdroogt eindelijk geheel, en de Pokken verschijnen op den vijftienden en zestienden dag als donker bruine roofjes, die van zelfs afvallen.

Ten dezen tijde, ook wel een weinig vroeger, komen hier en daar aan het lichaam enkele verspreide blaasjes (*pimples*) ten voorschijn, die het aanzien van even uitgebotte Pokken hebben. Het zijn, namentlijk, kleine, spitse, eenigzins verhevene roode knopjes, met eenen rooden rand omgeven. Deze Pokjes zijn dikwerf zoo klein, dat men dezelve nauwelijks ontdekt; zij verdwijnen in vier-en-twintig uren op eenige plaatsen, en komen op anderen weder ten voorschijn. Deze afwisselende uitslag duurt menigmaal van agt tot veertien dagen, nadat de ent-pokken reeds verdroogd zijn. Dikwils zijn die Pokjes in de spitse iets glinsterend, en bevatten dan een nauwelijks merkbare waterachtige vochtigheid, die zich in weinig dagen in eenen schurft verandert. In eenige, doch zeldzame, gevallen, openbaren zich, in plaats van de pokjes, roode plekken, die aan den netelen-uitslag gelijk zijn.

第十二日 接瘡周圍ノ紅色^及激劇シキ痲痛及瘡ノ大サ等著シク減シ瘡中ノ液モ其水様ノ^{〔虫食〕}状ヲ失シ粘稠ニナリテ膿状トナリテ^{〔自〕}黄ノ色ヲ得[□]其中点ニ於テハ微ニ痲ヲ結フ此^{〔虫食〕}症候時^{〔虫食〕}■^{〔虫食〕}■^{〔虫食〕}■^{〔虫食〕}■^{〔虫食〕}第十一日ニ己ニ見ワル、事アリ

第十三日 或十四日其第十一日第十二日ニ於テ己^{〔自〕}■^{〔自〕}結ヒカタリシ痲次第ニ廣カリテ圍ニ及フ潤ヘリシ液モ乾涸シテ第十五十六日至リテ全ク結痲シテ後終ニ自ラ落痲ニ至ルナリ

此時或ハ少シク以前ニ身中處々ニ痘見点ノ如キ頭尖リテ少シク腫起シ其周圍紅ナル小疱子ヲ生此疱子時トシテハ小サシテ細カニ察セサレハ見難シ此ノ疱子廿四時一日夜ナリ又消^{〔消〕}■又他處ニ発此ノ出没スル疱子ハ傳瘡已ニ乾涸シテ后第八日ヨリ十四日至リテ発スル事多シ每時此小疱頭ノ尖リタル處ニ光沢アリテ少許ノ水状ノ液ヲ含ム此瘡一二日ノ中ニ癬瘡ニ變ス稀ニハ此疱子ノ代ニ火麻瘡ニ等シキ紅点ヲ発ス

Voor 't overige is deze, zo even beschrevene, secundaire Koepokken-uitslag van geene beduiding; de Kinderen zijn 'er niet ziek bij, en ontwaaren niets onaangenaams. Indiens echter deze uitslag (uitbotting) eenige weken, na de verdroging der Ent-pokken, mogt voortduuren, en niet van zelfs verdwijnen wilde, zoo zal een zes- of agt-daagsch gebruik van het *verzoete quikzilver*, in kleine portien dien haast verdrijven. Deze uitbotting is geen noodzaaklijk gevolg van de echte Koepok-ziekte. Veele Inentelingen krijgen die niet, en zijn evenwel beveiligd voor de gewone kinder-ziekte.

Ik meen bemerkt te heben, dat een onmatig broeijen deze uitbotting zeer begunstigt: hierom treft men die ook, mijns erachtens, meerder aan bij zuigelingen, dan bij meer volwassene Kinderen. Deze ziekte behoeft voor het overige geen hulp der Geneesheeren; ook kan men bijna de gewoone levens-wijze houden. In den zomer bij droog weer, kan men de kinderen, gedurende den ganschen verloop der ziekte, vrij laten gaan. In den winter is 'er echter meer voorzichtigheid nodig. Na den gehelen afloop der ziekte, geeft men de Inentelingen een zachte purgatie.

其他児少シモ苦シム事ナシ然レトモ若シ此
 疱子牛痘〔一四丁表〕已ニ乾潤シテ后ニ
 一二七日ノ間癒スニハ輕劑ノトルシス¹⁹
 七八日用ルトキハ速ニ之ヲ驅除スルナリ此
 ノ疱ハ真ノ牛痘ノ必要ノ症ニ非ス傳接セル
 兒ニ此疱ヲ発セスシテ能ク真ノ痘瘡ノ防キ
 トナレハモノ多シ我々此ノ牛痘ヲ甚シク発
 スルコト甚タ善症ナリト思ユリ接ルニ此症
 故ニ乳ノミ子ニ多シ成長ノ兒ニ少シ此症他
 ノ医療ヲ用ルニ及ハス又食養等常ニ如クス
 ル事ヲ得夏月ニ於テ^開清天ノ日ニハ外ニ始
 終外ニ出ル事坊ナシ冬月ニハ寒ニ冒サレサ
 ルヤウニ心ヲ用ユ〔一四丁裏〕ヘシ又惣症
 退キテ后輕ク下劑ヲ用ユヘシ

19 ラテン語 *dulcis*。ここで *Mercurius dulcis* (オランダ語 *verzoete quikzilver*) の意。^{かんこう} 甘汞、塩化第一水銀、カロメルとも言う。

ABSTRACTS

Wolfgang MICHEL

On the Manuscript Shutō Shinsetsu (A New Theory of Inoculation) and its Background

Among the old manuscripts once kept by the Karashima family in Nakatsu, there is one entitled

A New Theory of Inoculation. Several ex libris seals of the physicians Karashima Chōrei (1779–1857) and his son Chōtoku (1806–1845) indicate that it was considered to be an important paper. It shows Western names in Japanese script, such as Edward Jenner, George Pearson, and William Woodville. It describes the characteristics of cowpox, the techniques of vaccination, and various symptoms that appeared after inoculations. One would not expect to find such a manuscript in the Karashima collection because this family was famous for its Chinese-style smallpox treatment, which was brought to 17th century Japan by the Chinese monk Dai Mangong (alias Tai Mankō or Dokuryūshōeki).

The manuscript shows neither a date nor any hint as to the author or copyist, but this text must have been written during the first half of the 19th century. A search for similar manuscripts located several with slightly different titles. They bear the name of Hiradaka Ryōdai (1797–1868), a physician from the village of Shinjō in the province of Aki (present-day Hiroshima Prefecture). One of them also mentions the name “Siebold” in Chinese characters. As Hiradaka went to Nagasaki in 1823 and became a disciple of Dr. Philipp Franz von Siebold, who had arrived at the Dutch trading post of Dejima in the summer of that year, one is tempted to link these texts to Siebold’s teachings.

Siebold later claimed that he had introduced Jenner’s vaccination into Japan. However, Japanese interest in this new method of smallpox prevention had grown long before his arrival in Nagasaki, and Jan Cock Blomhoff (1779–1853), who served as chief of the Dutch trading post from 1817 to 1824, deserves much more credit for his dedicated efforts to spread information, instruments, and vaccination material. According to various entries in his official diaries, Blomhoff had already requested lancets, vaccine material, and literature from Batavia during the early 1820s, but unfortunately several inoculation trials yielded poor results.

Then, in March 1823, the physicians Mima Junzō (1795–1825) and his colleague Minato Chōan (1786–1838) came to Dejima to meet Blomhoff. Mima had read Leonardus Davids’ Dutch translation of Jenner’s *Inquiry into the Causes and Effects of the Variolae Vaccinae* and indicated his intention to collect cowpox matter from supposedly infected cattle in the Amakusa area. Blomhoff, who soon became aware of their insufficient knowledge, pointed out the importance of distinguishing real cowpox from other similar symptoms. Furthermore, to improve their understanding, he provided a book that was more concise and easier to read than Jenner’s lengthy deliberations. He also asked the trading post physician Nicolaas Tullingh to conduct a vaccination for three people. This trial failed again and once more he ordered fresh vaccine.

The book Mima borrowed from Blomhoff was the German physician Heimann Josef Goldschmidt’s *Algemeene beschouwing van de geschiedenis der koepokken, en derzelver inenting*. This was the Dutch translation of a book published in 1801 in Frankfurt am Main by Goldschmidt (1761–1835). Goldschmidt, the son of a Jewish family in the Franconian village Baiersdorf, had lost both parents in his early childhood and grew up in the house of an uncle in Königsberg (Eastern Prussia). As he did not develop much interest in his uncle’s business, a well-to-do local sponsor supported his education, including his enrollment at Königsberg university. There he became an ardent adherent of Immanuel Kant’s enlightenment philosophy. In 1790, he defended an inaugural dissertation under Johann Daniel Metzger and received a doctoral degree in medicine.

During a journey to southern Germany, Goldschmidt managed to obtain permission to practice medicine as one of four Jewish physicians in Frankfurt am Main. He was obliged to live in the

narrow quarters of the Judengasse (Jews' Lane). However, but there were wealthy and highly educated inhabitants such as the famous banker Mayer Amschel Rothschild, and despite the still restrictive policy of the authorities, the local Jewish community maintained an outstanding school (Philanthropin) and a renowned hospital. In 1808, Goldschmidt converted to Catholicism and changed his name to Johann Baptista Clemens Goldschmidt. A few years later he was appointed municipal physician for three of Frankfurt's poor quarters (Armenquartier). After many struggles, the ghetto and all special Jewish taxes were abolished in 1811.

Goldschmidt was the first physician in that region to recognize the effectiveness and blessings of Jenner's vaccination and wrote *General Survey of the History of Cowpox and its Inoculation as the Surest and most Beneficial Method for the complete Eradication of Human Smallpox* (Allgemeine Übersicht der Geschichte der Kuhpocken und deren Einimpfung als das sicherste und heilsamste Mittel zur gänzlichen Ausrottung der Menschenblattern). It is dedicated to "all sensitive and loving parents who care about the life and health of their children" and reflects perfectly the author's lifelong endeavors to enlighten the general population. Only three years after the publication of Jenner's book, Goldschmidt had compiled a concise history of Jenner's discovery and the heated debates in Britain, France, and Germany, including a description of the difference between "real cowpox" and "pseudo cowpox," and last but not least the technique of vaccination and the various symptoms that appeared after inoculations. The Dutch translation of his book was probably undertaken by Leonardus Davids, a Jewish physician from Rotterdam who spearheaded the introduction of vaccination into the Netherlands.

In his conversations with Mima, Blomhoff had pointed out three important topics related to inoculations with cowpox. Hidaka Ryōdai's translation, titled *Shutō shinsho* (A New Book on Inoculation), was finished in 1825, perhaps with some help from Siebold. It comprises only three of Goldschmidt's thirteen chapters, and these chapters cover the exact problems pointed out by Blomhoff in March 1823. Several handwritten copies of Hidaka's translation circulated among physicians. One of these eventually ended up in the library of the Karashima family in Nakatsu.

There is another translation of Goldschmidt's book by the prominent physician Takano Chōei (1804–1850) who went to Nagasaki in 1820, and like Hidaka became Siebold's disciple in 1823. It is entitled *Gyūtō seppō* (Method of Vaccination), and like Hidaka's text, it presents the same three chapters, but shows significant different sentence structures and wordings. Takano had obviously made his own translation.

Judging from the number of preserved copies, Hidaka's and Takano's manuscripts circulated to some extent, but from the 1820s to the late 1840s, the vaccine lymph brought to Nagasaki repeatedly lost its potency during the long voyage from Batavia (Jakarta) to Japan. Nevertheless, studies of relevant Dutch books continued, although Japanese physicians still had no confirmation of the effectiveness or safety of cowpox inoculation.

Interest in Goldschmidt's book was rekindled when the trading post physician Dr. Otto Mohnike managed to provide active vaccine "crusts" in 1848. Believing in the potential merits of cowpox inoculation, physicians from all over the country rushed to Nagasaki asking for the vaccine. One of them was Arima Setsuzō (1817–1847) who in 1844 joined the famous Tekijuku school run by the scholar and physician Ogata Kōan in Ōsaka. There he soon proved to be a gifted scholar and was adopted by Ogata's father in law Okugawa Hyakki. Arima, too, had been in Nagasaki, and received Goldschmidt's book as a farewell gift from the reputable Ueno Tsuneashi (1790–1851). In contrast to Hidaka and Takano, Arima translated the complete book, leaving out only the

supplementary part and Goldschmidt's footnotes. As he died in 1847, his translation entitled *Gyūto shinsho* (A New Book on Vaccination) must have been completed before that date. Many authors write that it was printed in 1850, but there is not a single copy to prove such an assumption. Like Hidaka's partial translation, Arima's text circulated only as manuscript copies, several which are preserved in collections of 19th century physicians and regional lords.